

第六章 心の本質に就いて

心の本質に就いて申しますと、東京帝大の教授をしておられまして、六十歳になられて職を退かれました松本亦太郎博士がこの事に就いて種々書かれておりますが、「覚識」と言っておられますのが心の本質であります。

何でありまして、心は覚えでないものはありません。冷たさを覚える、暖かさを覚えるということは、木や石にもあるとは考えられません。私共でありまして、ぐっすり寝込んでおります時は、布団の中のぬくもりを感じるという事ありません。けれども目が覚めますと布団の中のぬくもりを感じて、冬などでありますとなかなか起き難うたくございます。そのように「心此処こゝにあらざれば見れども視えず、聞けども聴こえず」であります。ましてや木石に冷たみの覚え、ぬくともみの覚えがあるとは考えられません。私共が冷たみ、ぬくともみを感じる事ができますのは覚る者であるからであります。ここが木や石と違う所であります。感ずる

主としては六十年前と同一であり、感ずる主は、この身体がなくなっても変わらない者だということは今までにお話しして参りました。ではその知る主としての皆様は何処どこにおいてになりますか、という問題を出しました。知るのは心が知るのであるから、知る主を見つけるには心の所在ありかを探さねばならないというので、昨夜来種々と考えて参りました。

森羅万象はその時、その時の心であったということに就きましては、もう皆さんどなたも御異存ない事と思えます。見える限り、聞こえる限りにおいて、心とは「自分を中心として、あるいは内に、あるいは外に、あるいは近く、あるいは遠く、あなたごなたに分かれ位し、羅列して現れるもの」であるということに御異存なかったと思えます。頭の中にばかりあるというのとはとんでもない思い違いであったということ、もうどなたも御異存ない事と思えます。それで昨夜この問題を出しました。皆様はこの顔を見る事ができます。この見えている顔は現在皆様のお心であります。この心のどの部分が覚る主であるのかという問題を出しておきました。その所をこれから突きとめたいと思えます。

では、どうかお茶碗にお湯を入れて頂きとうございます。皆様が「手が痺びれて感じがなくなる。覚えがなくなる」とよく申します。その感じとは、事実はどうな事でありましょうか。黒板というのは名であります。（黒板を示されて）それはこういう事実であります。そのように感じとか、覚えの事実はどんなものでありましょうか。どうか茶碗に手をびつちやりとつけて頂きとうございます。そういたしますと、手の平にぬくまの感じができますナ。あるいはぬくとみの覚りと言ってもよろしゅうございます。「そんな事やらなくても分かっている」とおっしゃる方は、きつと分からない方であります。

覚えと申ししましても記憶ではありません。手をぴっちりつけます時、ぬくとみの覚えができた。このぬくとみの感じ、ぬくとみの覚りは木や石にもあるとお思ひになりましょうか。木や石にこのぬくとみの覚りがあるとは考えられません。木や石ばかりではありません。私共でもぐつすり寝込んでおります時にはぬくとみの覚りはありません。どうかもう一度ぴっちりつけて頂きとうございます。ぬくとみの覚りができましたですナ。マザマザとぬくとみが覚っております。ただぬくとみと言っただけでは言い足りない。ぬくとみの覚りと言わねばなりません。いかがでしょうか、このぬくとみと覚りとは二つ別のものでありましようか。事実上いかがでしょうか。その事実をよく突きとめて頂きとうございます。

手をぴっちりつけている時、そこにできているその一つ全体がぬくとみであり、ぬくとみの覚りがあります。ぬくとみと覚りとは分かつべからざる一であります。これは覚っているのでありますから心であります。どうぞ茶碗を下に置いて頂きとうございます。私共は茶碗に触れた時ぬくとみを感じました。暖かいものは触れなかつた時にはなかつたものであります。

けれども、皆さんはどうお考えになりましたでしょうか。触れていない時に茶碗の縁ふちにぬくとみがあるとお考えになりましたでしょうか。林檎には良い味があると申します。別に林檎を食べませんでも林檎には良い味があると申します。そのように触れていない時にも、やはり茶碗の縁にあると思われるぬくとみと、実際触れた時に感ずるぬくとみとは同じでありますでしょうか。それとも違ひましようか。もし違ふならば、どういふ違ひがありますでしょうか。

(上人) 徳永さん貴方、何とお考えになりましたでしょうか。

(徳永) そうですね、やはりそのスポットが異なるから。

(上人) なんですナ、それは前に触れた時と、それを下に置いた時とでは幾分か温度が下っているはずだというような差はもちろんあります。けれども、それは比較的相違でありますナ。大島さん、貴方は何とお考えになりますか。

(大島) 触れている時は覺つておりますけれども、触れていない時は覺つておりませんと思います。

(上人) そうですナ。触れておりません時は覺りでありませぬけれども、触れている時はぬくとみの覺りであります。マザマザと覺つております。ぬくとみと言つただけでは言い足りない。ぬくとみの覺りであると言わねばなりません。でありますから比較的相違であります。絶対的相違であります。ぬくとみの覺りは触れた時生まれるのであります。触れております時ぬくとみと覺りとが二つ別でありますならば、触れていない時、ぬくとみだけが残るといふ事が考えられますかも知れませんが、ぬくとみと覺りとは二つに分ける事できない一つであります。此処から此処までがぬくとみである。此処からあちらが覺りであるというように分ける事できません。その一つ全体がぬくとみでもあり覺りでもあるものであります。ですから茶碗に触れておりません時、覺つていません時、ぬくとみが茶碗の縁にあるという証拠などありません。「愚かな事言わつしやるナ。御覧なさい、ちゃんとぬくとみがあるではありませんか」と言われますが、それは触れている時はあります。触れておりません時は、ぬくとみがあるという証拠何処にもありはいたしません。私共は今、華蔽の瀧にドードーと水の落ちている音があると考えられます。その音と、今私が「オ——」と声を出します。その音と比較して頂きとうございます。

「オ——」いかがですか。「オ——」いかがですか。

現に聞こえている音と、今此処で思う華厳の瀧の音とどう違いますか。どうか事実をよく考えて頂きとうございます。これは観音を勉強するのでありますから、決して失礼な事を申すのではないと思えます。『法華経』には「観音様とは御名をお呼び申すのをお聞き下さって、ただちにお救い下さるから観音様と申すのである」と説いてあります。これは修行成就後のお働きを説いてあるのであります。けれども『首楞嚴経』にはそうは書いてありません。「観音様は、聞きこゆる聞きこゆるして観音様といわるべき尊い悟りを得られたから、観音様とお呼び申すのである」と説いてあります。これは観音様の御修行中の事を説いてあるのであります。ですから私共がこの事を考えますのは観音様を勉強するのでありますから、決して失礼な事でないと思えます。

また百年程前に山梨県の塩山の向嶽寺の住職をしておられましたぼつすい拔隊ぼつすい禪師という方をおられました。この方がお弟子さん達に「音の聞こゆるを聞いて三十年間して大我に目覚めなかつたら俺の首をやる」と言っておられました。本当にそうであります。歩きます時にも、下駄の足音を聞いて覚りであるという所に気を付けて歩きます。また電車に乗りましても走る音に心を止め、すべて聞こゆるを聞いて三十年修行して大我に目覚めなかつたら、私も首を差し上げます。もつとも成仏するという事になりますと、どうしてもお念仏しませんと如来様のお世嗣となる事できません。けれども大我に目覚めるといふだけの所でありますならば、これでも十分目覚めることができます。

音には聞こえている音と、聞こえていない音とがあります。これを混同するようでは正しい見方ということができます。

今現に見えておりますこの透き通った明るみ、また種々と見えておりますものは、やはり覚りであります。けれども触覚のぬくとみ、冷たみということで考えますのが一番分かり易いのであります。ぬくとみを感じますのは、識別をしないで直接に認識することができます。直観の事実であります。このことをジエームズは「純粹経験」と言っております。道で人に遇いまして、これはだれそれさんだと識別しますのは記憶が手伝うのであります。實際を離れて考えてばかりおりますと、空論になつてしまいます。事実を擱む事できません。この覚えという所をよく擱んで頂きとうございます。お分かり下さいましたでしょうか。それではさつそくお尋ねいたします。どうか茶碗を持って頂きとうございます。そのぬくとみの覚えと、私が今「オー」と声を出しますその声とを、よく比較して頂きとうございます。「オー」いかがでしょうか。どう違いますでしょうか。それとも全く同じ所がありますでしょうか。なんですナ、それは声とぬくとみとは違います。声はぬくとみではありません。ぬくとみは声ではありません。けれども現在「オー」と聞こえている音の覚りという所と、今びつちやり茶碗につけております時のぬくとみの覚りという所、覚えという所とは同じであります。おそらくこれに就いて御異存ありませんことと思ひます。覚りという所は全く同じであります。一切覚りでないものありません。昨夜の「現在見えている顔は覚りである。心である」ということは、もう御納得下さいましたことと思ひます。昨夜の所は夢の事など考えまして回めぐりましたが、今日の覚りであると、なお一層肉迫しております。

どうか眼を瞑つて頂きとうございます。いかがでしょうか。皆様は何か見えておりましたでしょうか。どうか眼を開けて頂きとうございます。

(上人) 貴方は何か見えておりましたか。

(A) 何も見えておりませんでした。

(上人) そうでしょうか。眼を瞑って頂きとうございます。私共には暗黒が見えますですナ。暗黒が覚つておりますナ。これは東京帝大の心理学の先生をしておられました元良博士が眠気覚しにお教え下さいました事であります。一切が覚りであります。物を持ち上げます時、それは重みの覚りであります。私共は生まれて今日まで種々な色彩を見ました。また声、香、味、触等を感じてまいりましたが、ただの色、声、香、味、触ではなかった、覚りであったと言わねばなりません。かつて私共は覚りという所に気が付かなかった、見逃していたという事になりますですナ。

ですから森羅万象が心であるという事に気が付かなかったのであります。『密厳経』または『厚厳経』に、「一切唯有覚」とあります。英国のバークリ (George Berkeley 1685~1753) も *esse est percipi* すなわち「存在とは覚りなり」と言っております。禅宗で大麥尊んでおります経の中の『首楞嚴経』に、

見與見縁似現前境元我覚明。(見も見縁も現前の境なるに似たれども、元より我が覚明なり)とあります。「見」と言いますと、眼のことであります。「見縁」とは色であります。「現前の境なるに似たれども」とは、心でないように思われるけれども、自分ではない他のものであるように思われるけれども、元より自分の覚りであるということでもあります。

普通の見解では、認識の主と客があると考えております。こちらに見る主があつて、向こうに見らるる物質があると考えますが、そんな事はないぞ、一切は自分の覚りだということでもあります。

私共は耳がなければ音は聞こえませんが、音は耳の中に聞こえてはいません。音であつて覺りであります。皆さんに見えているこの笹本の顔という心は、此処にたつた一つあるのであつて、この顔を離れてそちらの皆さんの頭の中にあるものではありません。こういう色、形を見たとは、こういう色、形となつて此処に心ができた事であります。色、形であつて、覺りであります。眼の世界は共有財産で認識の客であつて、心は人々別々の私有財産で、それが認識の主であるなどと考えるのは真つ赤な誤りであります。甲の人に入る刺激が、乙の人にも入るではありません。

もちろん根も、識も人々別々でありますから、できる心は人々別々であります。それはちょうどマッチ棒、マッチ箱の縁の薬、酸素ガスが別々で炎のみ共通のことはあり得ません。そのように原因が違うからできる炎、できる心も違ふと言わねばなりません。此処にある笹本の顔は共有財産で、それが認識の客であつて、認識の主たる皆さんは頭の中でそれを見るところと思ふと間違ひであります。一切は自分の心であります。一切は覺りであります。

『大般若經』六百卷を縮めますと、『般若心經』一卷となります。その『般若心經』をまた縮めますと、差別即平等、平等即差別、すなわち「色即是空、空即是色」ということとなります。でありますから、『大般若經』一切は結局、「色即是空、空即是色」ということを説いてるのであります。

ぬくとみの覚え、声の覚え、色の覚え、味の覚え、匂いの覚え、ぬくとみ、声、色、味、匂いというように分かれておりますが、一切覺りでないものありません。

黒板はその実物たるや色と形と分かつべからざる一つであります。けれども、これを觀察いたします時に

は色という側と、形という側との両方面から観察することができます。例えばそのように、ぬくとみと覚りと
は分かつべからざる一つであります。けれども、観察いたします時には、ぬくとみと覚えとの両方面から観
察する事ができます。見る主、聞く主としての自己とは、ぬくとみの覚え、色の覚え、味の覚え、匂いの覚
えというところの覚えという所が見る主、聞く主としての自己であります。どなた様も「ぬくとみ、声、色、
匂い、味という方が見る主、聞く主としての自己だ」とおっしゃる方はありませんでしょうナ。覚りはぬく
とみの覚るものであります。でありますから覚りが知る主であると言わねばなりません。ぬくとみ、声、色
彩、匂い等は見らるる客で、覚えが見る主、聞く主としての自己であつたのであります。

そういたしますと、総括いたしましたして見る主、聞く主としての自己は、十年前の自己と、今日の自己と全
く同一人であります。似ているというのではありません。右手の人差指と左手の人差指とは似ておりますけ
れども、二つ同一ではありません。(拍手) この音を聞く主としての皆様と(拍手) 後の音を聞く主としての
皆様とは相等しいというわけではありません。全く同一なのであります。one and the same であります。見
る主、聞く主としての自己「真実の自己」は一生を通じて、またこれから先も一貫して同一人であります。
この身体ではありません。この心でもありません。真実の自己は肉体が亡びても亡びない自己「いつも変わ
らない在り通しの自己」であります。しかし、半分なくなるもので、半分なくならないものというのではあ
りません。それでは、その真実の自己は何処にあるのかと申しますと、今日まで御同様に考えてまいりまし
た覚えというところであります。

私共は盲人でありませんから、見るという事できます。この見るという事はこの眼で見るのでありますよ

うか。心が見るのでありましょうか。見るとは知る事であります。ですから見るとは心が見るのであります。その心の覚っているところ、覚えが真実の自己であります。この声は覚えであります。この覚えという方面が真実の自己、見る主、聞く主としての自己であります。それで心というものを定義いたしますと、

「心とはいつ起こるどんな心も、その一つ全体が象でもあり、また覚りでもあるもの」

ということになります。心には腹立ちという心、うれしい、悲しいという心、見えているさまざまの眼の世界、聞こえている声、風の音等々種々あります。種々な心が時や、所を異にして起こるのでありますから「いつ起こるどんな心も」と言わねばなりません。「象」とは姿形のことです。この一場の眼の世界はかくのごとき透き通った明るみであり、顔及び周囲のボンヤリであり、それが象であります。しかもそれは覚りであり、覚る主としての皆さんであります。悲しみという心もその通り、考える心もその通り、すなわち心とは「その一つ全体が象でもあり、覚りでもあるもの」と名付けておくことができます。